

『アンドロマック』論

大西宗夫

(人文学部仏文研究室)

Sur *Andromaque*

Muneo ONISHI

(*Littérature française*)

1.

オレストがギリシャの使者としてピリュスの宮廷に姿をあらわすところで、『アンドロマック』は幕がひらく。

トロイアとの戦争はギリシャ側の勝利に終わり、トロイアは滅亡した。だがピリュスの宮廷では、今は亡きトロイアの英雄エクトールの妻アンドロマックと息子のアステリアナックスが囚われの身として生き残っている。アステリアナックスは死んだものと思われていたのだが、戦場ではほかの子供がすりかえられて身代りに殺され、アステリアナックス自身は生きのびていたのである。しかもピリュスは、ギリシャの王女、メネラスの娘エルミオーヌと婚約している身でありながら、囚われの女アンドロマックに恋情を抱き、エルミオーヌとの婚姻 (hymen) の約束をないがしろにしている。

そういうところへ、オレストがギリシャの命令、つまりトロイア王家の末裔でありギリシャの敵であるアステリアナックスを葬り去るようという命令を伝えにやってくるのである。

いわば、オレストとエルミオーヌはギリシャ世界に属し、アンドロマックと亡夫エクトール、息子アステリアナックスとはトロイアを代表し、その中間に位置するピリュスの宮廷は、このふたつの力が葛藤する場なのである。『アンドロマック』の舞台はこのように規定されている。

だがピリュスは、アステリアナックスを亡き者にせよというギリシャの命令に従うどころか、この要求を楯にとり、アンドロマックにあらたに迫る。すなわち、息子の命を救いたければ私と結婚せよ、と。アンドロマックは窮地に立たされる。エクトールが生前アンドロマックに語った言葉が彼女の台詞の中にある。

Je te laisse mon fils pour gage de ma foi :
S'il me perd, je prétends qu'il me retrouve en toi.
Si d'un heureux hymen la mémoire t'est chère,
Montre au fils à quel point tu chérissais le père.¹⁾

III, 8

エクトールはアンドロマックに二重の命令を課する。つまり、自分に対して忠実でありつづけることと、アステリアナックスの命を守り通すことである。もしエクトールに忠実であるためにピリュスの結婚の申し出をことわれば、アステリアナックスは殺され、エクトールの命令にそむくことになるだろう。かといって、アステリアナックスの命を救うためにピリュスと結婚すれば、やはり

エクトールを裏切らねばならないのである。こういう絶体絶命の境地にアンドロマックはおかれています。ここに悲劇の中心がある。

ロラン・バルトの『ラシーヌ論』では、アンドロマックはエクトールへの忠誠によって定義されている。彼女が息子を愛するのは、息子の中に夫の姿を見るからであり、さらには、夫であるエクトールが息子を愛することを命じたからである。バルトはアンドロマックのうちに母親の理想像を見ることをしりぞけ、次のように述べている。

(...) Hector lui a enjoint à la fois la fidélité à la tombe et le salut du fils parce que le fils c'est lui : il n'y a en fait qu'un même Sang, et c'est à lui qu'Andromaque doit être fidèle. (...) c'est parce qu'Andromaque n'est pas une mère, mais une amante, que la tragédie est possible.²⁾

卓見ではあるが、アンドロマックのうちにある母性的なものを全否定してしまうのは、行き過ぎの感がある。シャルル・モーロンは、『ラシーヌの作品と生涯における無意識³⁾』の中で、ピリュスのアンドロマックに対する愛情はエディプス的なものであると述べている。つまり、アンドロマックはピリュスにとって母という無意識的な意味を持っているということである。たしかに、エクトール—アンドロマック—アスティアナックスというエディプスの三角形の中で、すぐれて父性的な存在であるエクトールの死によって生まれた空席をピリュスは占めようとするわけであるから、ピリュスの欲望は、父にとってかわり母を自分のものとするエディプス的な様相を帯びたものであるとも考えられる。だが、アンドロマックがピリュスにとって母性的な意味を持っているという事実を誇張して考えてはなるまい。

バルトはむしろアンドロマックのアスティアナックスに対する関係に近親相姦的なものをみている。

On peut imaginer la haine qu'Astyanax vivant pourrait développer contre ce Père qui tient toute sa place (...) La fidélité au mari est si dévorante, et l'assimilation du fils à l'époux si étroite, que la maternité en devient incestueuse (...) ⁴⁾

そして次の一行を引用している。

Il m'aurait tenu lieu d'un père et d'un époux ;

I, 4

モーロンは精神分析的な文芸批評の先駆者のひとりであるが、フロイト的というよりは心理学的な臆見にとらわれているところがある。たとえば『アンドロマック』において、ピリュスがラシーヌの〈自我〉をあらわしていると考えようところがそうである⁵⁾。こういう考え方はほとんど無意味に近いといってもいい。今どき誰も、ある文学作品のなかで、これこれの人物は〈自我〉、別の人物は〈超自我〉あるいは〈エス〉を代表しているといった素朴な読解はすまい。それにモーロンは〈自我〉という概念で〈意志的な主人〉(maitre volontaire)⁶⁾を考えているのだが、意識や自我といったものが「自分自身の家の主人」ではけっしてありえない⁷⁾というのが、フロイトの最大の発見ではなかったか。だが誤解を避けるために一言すれば、ところによってモーロンの所論にはついていけないところがあるとはいえ、さまざまな細部の解釈においては創見に富んでいて、教えられるところは大きく、バルトの『ラシーヌ論』でさえもモーロンの影響を受けているほどである。

モーロンの重要な指摘をひとつ取り上げてみよう。モーロンによれば、ピリュスの罪は不実にある。それはピリュス自身のエルミオーヌに対する不実であり、またアンドロマックに彼女が夫に対して不実になるように要求することである。だがもし忠誠が支配し、ピリュスがエルミオーヌのもとにもどり、アンドロマックにエクトールを忘れるように求めるのをやめれば、ある種の道徳性は満たされるだろうが、トロイア戦争は終結せず、アスティアナックスは死ななければならないだろう。父を亡くし、いま命を脅かされているアスティアナックスのうちに、孤児であったラシーヌは自分を投影していたのかもしれない。舞台上に登場することもない、このアスティアナックスの存在がラシーヌの無意識にとっては重要な意味を持っていたということもありうることである⁸⁾。

2.

オレストとピリュスの会見の場を話を移そう。

オレストは、エクトールによって夫や父を奪われたギリシャのすべての家族が、この英雄の子の死を要求していると述べ、アスティアナックスをいま処分しなければ将来ギリシャに抗して立ち上がることがあるかもしれないといて、ピリュスに迫るが、ピリュスは自分の国が第二のトロイアになろうとも、ギリシャの要求をのむわけにはいかないといって拒む。

Oreste

Ainsi la Grèce en vous trouve un enfant rebelle ?

Pyrrhus

Et je n'ai donc vaincu que pour dépendre d'elle ?

Oreste

Hermione, Seigneur, arrêtera vos coups :

Ses yeux s'opposeront entre son père et vous.

Pyrrhus

Hermione, Seigneur, peut m'être toujours chère ;

Je puis l'aimer, sans être esclave de son père ;

I, 2

ここでピリュスは、反抗を開始した子供 (enfant rebelle)、父の権威から独立しようとしはじめた存在としてあらわれる。ここで父といっても、ピリュス自身の父ではないから、一般的に父性的なるもの、ラカン的に言えば、想像的欲望が支配するナルシズム的世界のうちに象徴界の秩序や法を導き入れる父の原理を拒んでいるといってもよい。ピリュスは、秩序も法もなしに欲望が跳梁する世界に住んでいるのである。彼はアンドロマックへの欲情ゆえに、ギリシャが課する法を拒絶し、欲望が従属すべき法を、むしろ欲望に従属させている。

ピリュスはオレストの要求に対して、あれこれと理由をあげて拒否するが、それらの理由はたんなる言い逃れにすぎず、本心ではアスティアナックスの命を種にアンドロマックを口説きおとすことしか考えていない。

オレストもまた、アスティアナックスを殺すようにピリュスを説得してはいるが、ほんとうは、ピリュスがギリシャの要求を拒みアンドロマックと結婚して、自分はエルミオーヌを連れ去ることができることを望んでいるだけである。第一、この宮廷へやってきたのが、使者の務めを果たすためではなく、エルミオーヌに会いたいためだったのだ。だが、オレストにはのちにふれよう。

オレストとの会見を終えたのち、ピリュスはアンドロマックに合う。生殺与奪の権をにぎって

るにもかかわらず、彼の口調はうやうやしい。

Me cherchiez-vous, Madame?

Un espoir si charmant me serait-il permis?

I, 4

それに答えるアンドロマックの眼中には、亡き夫と残された子供のことしかない。

Je passais jusqu'aux lieux où l'on garde mon fils.

Puisqu'une fois le jour vous souffrez que je voie

Le seul bien qui me reste et d'Hector et de Troie,

J'allais, Seigneur, pleurer un moment avec lui;

I, 4

喪に服する未亡人、たえまなく涙にくれる母というイメージは、アンドロマックのこの最初の台詞ですでに明らかである。ピリュスと妥協することなど念頭にもないのだ。

ピリュスはアンドロマックに、オレストがギリシャ側のどんな要求を伝えに来たのか教え、もし自分と結婚するなら子供の命は救おうと申し出る。この申し出が彼女をどんな窮地に立たせるかはすでに論じておいた。彼女がピリュスの願いを拒んだことはいうまでもあるまい。

いくら思いを寄せても亡き夫への忠誠を理由に頑なに拒みつづけるアンドロマックに対して、ピリュスの恋がついに憎悪に転じるときが来る。彼は決心を翻して、オレストに、アステリアナックスはギリシャに引き渡すこと、そして彼自身はかねての約束通りエルミオーヌと結婚することを伝える。

J'abandonne son fils. Que de pleurs vont couler!

De quel nom sa douleur me va-t-elle appeler!

Quel spectacle pour elle aujourd'hui se dispose!

Elle en mourra, Poenix, et j'en serai la cause.

C'est lui mettre moi-même un poignard dans le sein,

II, 5

ピリュスの憎悪は殺意にまでたかまるが、この激しい憎悪の裏側には、まだアンドロマックに対する恋情が断ち切られずに残っている。エルミオーヌと結婚する決意を固めておきながら、もし自分が彼女と結婚したなら、アンドロマックは嫉妬してくれるだろうかなど気に病んだりするのである。

ピリュスの決心を知ったアンドロマックは、エルミオーヌに、息子のためピリュスにはたらきかけてくれるよう懇願するが無駄である。アンドロマックはもう一度ピリュスのところへ行く。ピリュスが出す条件は同じである。

An nom de votre fils, cessons de nous haïr.

A le sauver enfin c'est moi qui vous convie.

(..)

Pour la dernière fois, sauvez-le, sauvez-nous.

(..)

Je vous conduis au temple où son hymen s'appête;

III, 7

エルミオーヌとの婚姻の儀式が準備されている神殿でかわりにアンドロマックがピリュスと結婚しなければならない。それ以外にアスティアナックスを救う道はない。
それでもアンドロマックは抵抗する。

Il ne me restait plus qu'à condamner mon fils. III, 8

セフィーズはそれを諭している。

Madame, à votre époux c'est être assez fidèle :
Trop de vertu pourrait vous rendre criminelle. III, 8

追いつめられたアンドロマックはエクトールの墓⁹⁾へ相談に行く。

Allons sur son tombeau consulter mon époux. III, 8

夫の墓からもどった彼女はピリュスとの結婚を承諾して息子を救う決心を固めているが、そのために自らを犠牲にするつもりなのだ。夫が彼女に命じた〈戦略〉(stratagème)とは次のようなものである。

Je vais, en recevant sa foi sur les autels,
L'engager à mon fils par des noeuds immortels.
Mais aussitôt ma main, à moi seule funeste,
D'une infidèle vie abrégera le reste,
Et sauvant ma vertu, rendra ce que je doi
A Pyrrhus, à mon fils, à mon époux, à moi.
Voilà de mon amour l'innocent stratagème ;
Voilà ce qu'un époux m'a commandé lui-même. IV, 1

これがアンドロマックが見出した出口である。息子を守り、かつ夫に忠誠を保つために、自ら死ぬこと。自死以外に抜け道のない絶体絶命の境地で、自らを生かすために、彼女は自殺する。悲劇の女主人公にふさわしい結論といえよう。

3.

オレストとエルミオーヌにふれておかねばならない。

もともとオレストがピリュスの宮廷に派遣される使者の役をかってでたのは、そこに行けばエルミオーヌに会えるためだ。彼にとってギリシャの主張する掟は最初からどうでもいいのであり、ただ自分の欲望に忠実だっただけである。

Heureux si je pouvais (...)
Au lieu d'Astyanax lui ravir ma princesse ! I, 1

ギリシャが要求するエクトールの息子ではなく、自分が恋するエルミオーヌを奪い取ること、オレストの望むのはこれだけだ。だが彼はエルミオーヌからないがしろにされ、死の想念にとりつかれているが、死さえも彼をとらえてはくれない。

Enfin je viens à vous, et je me vois réduit
A chercher dans vos yeux une mort qui me fuit.

II, 2

エルミオーヌは、自分は義務に従うだけであり、アスティアナックスをギリシャに渡し自分と結婚するか、ギリシャに対する反逆児となってアンドロマックと結婚するかを決定するのはピリュスであるという。もしピリュスがアンドロマックを選ぶなら、彼女はオレストにつきしたがってもいいと答える。この劇の中心にあつて決定権を握っているのはピリュスであり、オレストやエルミオーヌの運命も彼にかかっている。だがそのピリュス自身、アンドロマックの返事を待っているのであり、すべてはアンドロマック次第ともいえる。アンドロマックはどう答えるか。先に見たとおり、彼女は最初ピリュスの申し出をことわりつづけ、その頑なさに恋情を憎悪に転じたピリュスは、彼女に対する復讐の意味もこめて、エルミオーヌと結婚するとオレストに告げる。

絶望したオレストは、力づくでもエルミオーヌをピリュスから奪おうと考える。だが自分の人生を振り返ってみたとき、不運ばかりが目につくのはどうしてだろう。深い憂愁がオレストをとらえる。

De quelque part sur moi que je tourne les yeux,
Je ne vois que malheurs qui condamnent les Dieux.
Méritons leur courroux, justifions leur haine,
Et que le fruit du crime en précède la peine.
Mais toi, par quelle erreur veux-tu toujours sur toi
Détourner un courroux qui ne cherche que moi?
Assez et trop longtemps mon amitié t'accable:
Évite un malheureux, abandonne un coupable.

III, 1

モーロンはここにオレストの鬱病的傾向 (tendance mélancholique) を読みとり、最後の場面での彼の発狂を、この傾向の論理的帰結ととらえる¹⁰⁾。だが発狂したオレストは幻覚と妄想に襲われており、分裂病かパラノイアといった方がよいのではないだろうか。もっともオレストの病名はどちらでもよい。

神殿ではピリュスとエルミオーヌの婚姻の儀式の準備が進められる。その間、追いつめられたアンドロマックは、夫の墓前に相談に行き、ついにピリュスとの結婚を受け入れる。ただし婚姻の誓いが立てられるやいなや、自殺する覚悟で。

エルミオーヌのため神殿で準備が進められていた婚姻の儀式はアンドロマックのためのものとなり、エルミオーヌは嫉妬に狂う。それも静かに狂うというべきか。クレオーヌがエルミオーヌに言う。

Non, je ne puis assez admirer le silence.
Vous vous taisez, Madame (...)

(...)

Il l'épouse : il lui donne, avec son diadème,
 La foi que vous venez de recevoir vous-même,
 Et votre bouche encor, muette à tant d'ennui,
 N'a pas daigné s'ouvrir pour se plaindre de lui?

IV, 2

この無気味な沈黙のうちで、エルミオーヌの復讐の念が育っていく。エルミオーヌは言葉少なにオレストに命ずる。

Venge-moi, je crois tout.

IV, 3

私を裏切った以上ピリュスは死なねばならぬ。これが、エルミオーヌの嫉妬の結論である。ピリュス暗殺の任は、オレストに託される。オレストがピリュスを殺すのは、エルミオーヌの意志を実現するためだ。モーロンはこの点をとらえて、オレストをエルミオーヌの「道具」(instrument)にすぎないと述べている。

Oreste se trouve réduit à un rang subalterne : il transmet les décisions de Pyrrhus ou sert d'instrument à la vengeance d'Hermione (...) ¹¹⁾

バルトも、オレストをエルミオーヌの「道具的分身」(double instrumental)と規定している¹²⁾。「分身」(double)という概念もモーロンに由来するものである。モーロンによれば、「分身」とは次のようなものである。

Le «double» est, en gros, la moitié de la personnalité qui a été refoulée par l'autre mais lui demeure vitalement liée et la poursuit comme son ombre, ¹³⁾

モーロンも、その影響を受けたバルトも、オレストを独自の存在を持たない「分身」、「道具」としてのみとらえるのであるが、私はこの点に同意しがたいものが残る。オレストに「道具」とみなされる傾向があるのは否定しえないが、それがすべてではないと考えるのである。私はもうすこしオレストにつきあってみたい。

人間は他者の道具として殺人を遂行したりできるものだろうか。たとえオレストがピリュスを殺すのは、エルミオーヌの意志に従ったためであったとしても、オレスト独自の意志がそこに加担しなければピリュスを暗殺したりすることはできまいと私には思える。

それはとにかく、オレストは部下のギリシャ人たちを率いて、ピリュスとアンドロマックの婚姻の儀式が行われている神殿へ赴き、ピリュス暗殺に成功する。ただし、エルミオーヌの願いによれば、ピリュスはギリシャに対する反逆児として暗殺されるのではなく、エルミオーヌを裏切った報いとして殺されるのでなければならなかった。

Qu'on l'immole à ma haine, et non pas à l'Etat.
 Chère Cléone, cours. Ma vengeance est perdue
 S'il ignore en mourant que c'est moi qui le tue.

IV, 4

ピリュス暗殺を終えたオレストが、これでエルミオーヌは自分のものだと言ひ喜び勇んで彼女のもと

へ報告にやって来ると、すでにピリュス殺しを命じたことで後悔の意に襲われていたエルミオーヌの口から思いもかけぬ言葉を聞くことになる。

Tais-toi, perfide,
Et n'impute qu'à toi ton lâche parricide.

(...)

Pourquoi l'assassiner? Qu'a-t-il fait? A quel titre?
Qui te l'a dit?

V, 3

エルミオーヌの口から出る〈parricide〉という語に注意してもらいたい。この語には、近親者として父親を殺すことから、君主の殺害、祖国や神に対する罪という意味まである。ここでは無論、ピリュスという王を殺した事実を指して使われているのだが、精神分析的観点から解釈するなら、父親殺しという含みも取り上げるべきだろう。無意識においては、王とは父親の象徴にほかならないからである。〈parricide〉という語は、オレストの口からも発せられる。

J'assassine à regret un roi que je révère;

(...)

Je deviens parricide, assassin, sacrilège.

V, 4

ピリュスが父に対する反抗のうちにあるということはすでに指摘したが、オレストもここにいたって父親的なものを殺害する。『アンドロマック』という戯曲においては、欲望を律する法や秩序が不在であり、それは父の不在に由来するといえよう。トロイアを代表する父エクトールは死んでおり、ギリシャを代表する父メネラスは、ピリュスやオレストの欲望の前でないがしろにされている。モーロンの指摘によれば、ラシーヌの一連の戯曲で、不在の父が回帰してくる (retour du père) のは、『ミトリダート』以後のことである。

このあと、エルミオーヌはピリュスのあとを追って自殺し、オレストは発狂する。錯乱したオレストの口から出る言葉は、ある無意識の真理を暴露する。

Où sont ces deux amants? Pour couronner ma joie,
Dans leur sang, dans le mien il faut que je me noie;
L'un et l'autre en mourant je les veux regarder.
Réunissons trois cœurs qui n'ont pu s'accorder.

V, scène dernière

私はとりわけ最後の一行に心を惹かれる。「けっして一致することのなかった三つの心をいまこそひとつに合わせよう」とはどういうことなのか。私は、ドストエフスキーの『白痴』の最後の場面を思い浮かべる。

『アンドロマック』も『白痴』も、ともに男女の四角関係を主題にした作品である。三角関係を取り扱った文学作品などうんざりするほどあるだろうが、四角関係を真正面から描いた作品を私はあまり知らない。『アンドロマック』では、オレストがピリュスを殺しエルミオーヌが自殺する。『白痴』の破局もそれにおとらず戦慄的なものである。白熱した四角関係の果てでラゴージンはナスターシャを殺し、ナスターシャの死体のある部屋にムイシュキン公爵を迎え入れる。このとき、ふたりは心の底から打ちとけて話し合う。そしてラゴージンは熱にうなされ意識を失い、ムイシュキン

公爵はふたたび白痴にもどる。公爵はラゴージンが「叫び声やうわごとを発するたびに、急いで震える手をさしのべ、まるで彼をあやしなだめるように、そつとその頭や頬をなでている¹⁴⁾」のである。オレストの〈Réunissons trois cœurs qui n'ont pu s'accorder〉という台詞から私が連想せざるをえないのは、『白痴』のこの場面なのである。ここでは「けっして一致することのなかった三つの心」がひとつになっているのではないだろうか。そしてオレストが錯乱の中で夢見たものはこのような光景ではなかったか。

荻野恒一が『嫉妬の構造¹⁵⁾』で述べているように、嫉妬に駆られた場合、恋人を殺すか恋敵を殺すかは些細な問題ではない。フロイトは『嫉妬、パラノイア、同性愛に関する二、三の神経症的機制について』という論文の中で次のように述べている。

それというのも嫉妬はふかく無意識に根ざしていて、小児のごく早い時期のエディプス・コンプレックスや同胞コンプレックスに起源をもつからである。嫉妬を多くの人には両性的に体験する、というのは、男性の場合を例にとると、愛する女性を失う苦痛と恋がたきの男性への憎悪とを経験するほか、無意識のうちに愛した男性を失う悲哀と競争者としての女性への憎悪が強まることがある¹⁶⁾。

恋敵を殺すオレストでは、「愛する女性を失う苦痛と恋がたきの男性への憎悪」が前面に出ており、恋人を殺すラゴージンでは「無意識のうちに愛した男性を失う悲哀と競争者としての女性への憎悪」が表立っていると見えるだろう。だがフロイトも指摘しているとおり、嫉妬は両性的なものであり、表にあらわれた感情とは反対の感情が無意識の中に隠されていることを考えれば、オレストとラゴージンは同じメダルの表と裏の関係にあるわけである。現にオレストにも尊敬している男性を心ならずも殺してしまったという罪悪感が生じている。

J'assassine à regret un roi que je révère :

V, 4

こう考えてくると、私がラシーヌの『アンドロマック』からドストエフスキーの『白痴』を連想したのも、それほど無理なことではないのではないだろうか。

4.

次に、オレストを襲う幻覚を分析してみよう。

Mais quelle épaisse nuit tout à coup m'environne ?

V, scène dernière.

オレストを取り囲む「部厚い夜の闇」は、父親を殺したオイディプス王が自己処罰として眼を潰し、沈みこんだ闇と同じものだろう。この場合、失明は、下から上へ移動された去勢の象徴であることはよく知られている。このあと幻覚の中にピリュスが蘇えり、さらにエルミオーヌと復讐の女神エリニウスとが姿をあらわす。

Dieux ! quels affreux regards elle jette sur moi !

Quels démons, quels serpents traîne-t-elle après soi ?

Hé bien ! filles d'enfer, vos mains sont-elles prêtes ?

Pour qui sont ces serpents qui sifflent sur vos têtes?

V, scère dernière

幻覚に登場する「蛇」は、言うまでもなく、男根の象徴であるが、髪が蛇になっている女神というのは、男根的女性 (femme phallique) のイマージュであろう。

ここで去勢コンプレックスについてごく簡単にふれておこう。小さな男の子の場合、自分についているペニスのように重要な器官が欠除している存在を考えることもできないので、彼は自然に女性にもペニスはあるという空想を育てている。男の子は自分でペニスをいじっていたりすると、父親などから、「そんなことをするとオチンチンを切り取るぞ」といった威嚇をうけたりすることがよくあるが、彼は無関心である。しかしのちに、女性の性器を目撃する機会があって、そこにペニスがないことを確認すると、去勢の威嚇は現実性を帯びてくる。つまり自分もほんとうにペニスを奪い取られることがあるかもしれないというわけである。この男根期の性的活動において、ペニスは「母親に対する欲望の道具¹⁷⁾」という意味を持っている。自慰は母親に対する近親相姦の関係なのである。父による去勢威嚇を前にして、あるものは、去勢をまぬがれるために、母親を対象とする自慰行為を断念し、父に同一化することでエディプス・コンプレックスを克服するだろう。だがなかには、女性にはペニスが欠除しているという事実を否認 (Verleugnung, déni) することによって自我を防衛するものもある。この場面には、男根的女性 (femme phallique) の空想がともなう。これは精神病 (神経症ではない) の一段階となりうるものである。オレストの幻覚にあらわれる蛇の髪をした女神たちとは、この男根的女性の神話的形象にほかならない。

Venez-vous m'enlever dans l'éternelle nuit?

V, scène dernière

この「永遠の夜」は、さきほどの「部厚い夜の闇」と同様、父親殺しへの罰としての去勢と、その代理としての失明の恐怖に対応する。

Et je lui porte enfin mon cœur à dévorer.

V, scène dernière

心臓をむさぼりくられるというのは、口唇の攻撃性のイマージュであり、前エディプス期の太古的な段階への固着を語っている。

以上、オレストの幻覚を考察したかぎり、私には彼の症状は分裂病タイプのものに思えるが、モーロンは鬱病的なものと考えているようである。私はモーロンの見解に同意できないが、どちらをとるかは読者の判断に委せよう。

5.

ピリュスは殺され、エルミオーヌは自殺し、オレストは発狂する。そして、かつては囚われの身であったアンドロマックが権力の座につく。

Aux ordres d'Andromaque ici tout est soumis ;
Ils la traitent en reine, et nous comme ennemis.
Andromaque, elle-même, à Pyrrhus si rebelle,
Lui rend tous les devoirs d'une veuve fidèle,

V, scène dernière

劇のはじめでは勝ち誇っていたギリシャが転落し、敗者であったトロイアが勝利をおさめる。トロイアの生き残りであるアンドロマックがピリュスの跡を継いで女王となり支配するのだが、それはピリュスの「忠実な未亡人」(une veuve fidèle)としての義務を果たすためである、かつてエクトールの「忠実な未亡人」としての義務を果たしたように。アンドロマックに課されていた解きたい難問が解決を見出したのである。ピリュスもオレストもエルミオーヌも、おそらく誰ひとり予測しなかったであろう解決を、である。バルトはこの劇の終幕について次のように書いている。

Pyrrhus mort, elle décide de vivre et de régner, non comme amante enfin débarrassée d'un tyran odieux, mais comme veuve véritable, comme héritière légitime du trône de Pyrrhus. La mort de Pyrrhus n'a pas libéré Andromaque, elle l'a initiée: Andromaque a fait sa conversion, elle est libre¹⁸⁾.

古い世界は崩壊し、新しい秩序が樹立される。アンドロマックは今や自由である。彼女は不在の父親にかわり、女王=母として、この新しい世界に君臨するだろう。

註

- 1) ラシーヌからの引用は、すべて『アンドロマック』である。Racine, Œuvres complètes I, Bibliothèque de la Pléiade, に拠る。Acte III, Scène VIII, はIII, 8と表記する。
- 2) Roland Barthes, *Sur Racine*, Seuil, p. 81.
- 3) Charles Mauron, *L'inconscient dans l'œuvre et la vie de Racine*, Librairie José Corti.
- 4) R. Barthes, op.cit., P. 81
- 5) Ch. Mauron, op.cit., P. 54
- 6) Ch. Mauron, op.cit., p. 53
- 7)フロイト, 『精神分析学入門』, 懸田克躬訳, 中公文庫, p. 388
- 8) 最初に引用したアンドロマックの台詞中のエクトールの言葉にはもうひとつ注目すべき点がある。つまりアンドロマックは、エクトール亡きあと、息子が彼女のうちに父の面影を見出せるように要請されているのである。亡父の思い出を息子に語れというのではなく、息子に対して母としてだけではなく、父としての役割をも演じよというわけだ。母が息子に対して父の機能を帯びるということは、精神的分析的には、男根的母親 (mère phallique) になるということである。
- 9) 墓とは、フロイト的にいえば、ファルス (男根) の象徴である。ラカンには、エディプス・コンプレックスにおいて問題となるのは、父—母—子という三角形ではなく、(父)—ファルス—母—子という三角形だと述べている。(Jacques Lacan, *Le Séminaire III, les Psychoses*, Seuil, p. 359)
- 10) Ch. Mauron, op. cit., p. 109
- 11) Ch. Mauron, op. cit., p. 54
- 12) R. Barthes, op. cit., p. 80
- 13) Ch. Mauron, op. cit., p. 34
- 14) ドストエフスキー, 『白痴』下, 木村浩訳, 新潮文庫, p.546.
- 15) 紀伊國屋書店.
- 16) フロイト著作集6, 人文書院, p. 254
- 17) ラプランシュ, ポンタリス, 『精神分析用語辞典』, 村上仁監訳, みすず書房, p. 90.
- 18) R. Barthes, op. cit., p. 86

